

対話を核とした学習過程デザインにかかる要件

—見立てによる詩創作の考察—

キーワード：対話 モダンテクニック 見立て 詩的言語 詩創作 学習材

上越教育大学 古閑 晶子

1 問題の所在と研究の目的

言語の教育としてカリキュラムの中核を成す国語科授業において、「言語活動の充実」¹⁾を志向する学習過程デザインが改めて問われている。では、詩創作の学習において、学習者主体の意味生成にかかる言語活動をつくるには、どのような要素を捉え直して学習過程をデザインするのだろうか。

足立悦男(2008)は、詩教材において、五つの編成軸「話者、存在、思想、時間・空間、ことば」²⁾により、「異化の現象を作り出す」²⁾仕組みを捉える。言語に対する詩的機能から学習を捉えようとする学習過程デザインが見出せる。これは、複数の言語の仕組みが、詩的契機となり、詩的な見方・考え方・表し方を生成する、詩特有の詩的言語知識や思考表現にかかる学習材としての要素である。

塚田泰彦(1992)は、このような詩に特有の言語の仕組みについて、「詩の場合は多分にまとまりを付けにくい開かれた構造のままであるだろう。これがまた一つの論理や説明に還元されることなく深い『想い』へと私たちを導く詩に特有の仕組みでもある」⁴⁾と、その複雑な関係性故の詩の豊かな可能性に着目する。

児玉忠(2012)は、このような複雑な可能態として詩の生成に着目し、「詩を生み出す発想・認識は詩人それぞれの個性とふかく結びついており、性急な一般化・方法化は危険でもある。しかし、こうした要素こそが、創作において虚構世界の生成をうながす」⁵⁾と述べる。個性的な詩創作の学習において、学習者は、詩的言語の要素にどのようにかかわっていくのか、重要な課題が挙げられる。

三者に通じる学習過程デザインにおける課題は、詩を創作する言語活動の学習過程において、学習者が自らの思考表現の有り様を見つめながら、どのように複数の詩的言語の仕組みとつながっていくのかという、学習材化の在り方である。

府川源一郎(2002)は、「日常とは別の場・空間」⁶⁾

に離脱する経験そのものを、「言語化することで、自分の『欲望』の生成装置を意識化」⁷⁾し、学習者相互に詩の生成過程を吟味する必要を強調する。ここから、詩的言語の仕組みにかかる学習材は、学習過程において、提示・応用・一般化する型として機能するのでも、詩創作の表現活動の中に拡散して機能するものではないことが分かる。既有的見方とのズレや、学習者間のイメージ化とのズレを促す詩的契機として、詩の生成過程と一体化して機能するものと捉えられる。

つまり、詩的言語の仕組みにかかる学習材は、詩の生成過程において、出会い、立ち止まり、問い合う対話的機能を有したものと学習材化される必要がある。従って、詩創作の学習過程デザインには、詩の生成過程が言語化される、必然としての対話の要素が欠かせない。

そこで、本研究では、対話性を内包する詩的契機としての学習材が機能する詩創作の学習を創出し、学習過程の内実を分析考察することで、詩創作の学習過程デザインに必要な対話の要件を見出すことを目的とする。

2 詩創作における学習材が内包する対話性

筆者は、一昨年、連詩創作の単元開発に携わり、意味生成にかかる学習者の姿を分析考察する実践的・臨床的研究を行った。その際、既知との関係付けや異なる解釈との相対化による問い直し、他者との統合や新たな創造を伴う、重層化した「対話」の姿が、学習過程において前掲化する様相を見出すことができた。⁸⁾(図1参照)

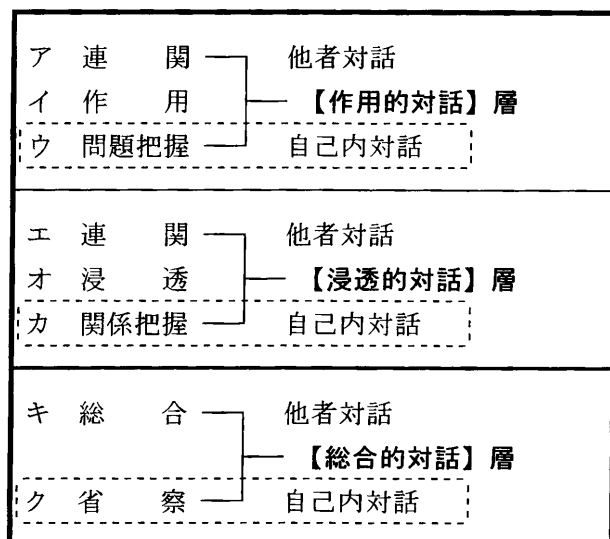
「作用的・浸透的・総合的対話」と重層化する対話過程において、他者とコミュニケーション可能なかたちで、対象を問い、捉え直していく、学習材化に関係する要件も、次のように見えた。⁹⁾

○ 対話が生成するには、既有的言語知識を想起せざるを得ないテキストの言葉とのズレに関わり、

応答し合うこと

- 対話が相互に浸透していくには、各学習者の使う言葉とイメージ化のズレを相対的に捉え直し葛藤する思考活動をつくること
- 対話が新しい知見を創出していくには、判断に迷っている言葉に立ち止まり、それを学習者間で共有すること

＜図1 対話の重層的要素＞



ここから、詩創作における学習材は、他者とコミュニケーション可能なかたちで、対話過程の三層にもなっており、異なる学習材化として学習過程に機能する必要があるといえる。

詩的言語の仕組みにかかる学習材は、詩の生成過程と一体化する対話の三層と共に、どのようなかたちで学習材化を図るのか考究していく。

3 見立てによる詩創作における学習材の対話性

対話性を内包する詩的契機としての学習材が機能する詩創作の学習を考究する。

(1) 見立てによる詩的契機としての学習材

詩創作において対話が生成するには、既存の散文的な言語知識とのズレと出会い、詩的契機となる発想が立ち上がる必要がある。

山梨正明(1988)は、「比喩は積極的な認識のプロセスであり、そこには外部世界の知覚や認知のしかたが反映されている。比喩を通しての経験は、新しい認識や想像的な象徴の世界への入り口でもある」¹⁰⁾と述べ、比喩の派生プロセスに着目する。そして、「根源的には<知覚>、<身体感覚>等の具体的な経験に根ざす比喩から派生」¹¹⁾する「多面的、複合的なく見立てのモデル」を介してさまざまな抽

象概念の理解が可能」¹²⁾になると述べ、「見立て」ることが根源的な認知を生成すると捉える。

岩田純一(1988)もまた、「比喩を生み出すことの根底にあるのは、異質なモノ・コト同士を写像的に重ね合わせてみる能力である」¹³⁾と述べ、写像的な重ね合わせによる比喩的思考を「比喩ル」¹⁴⁾と名付ける。

「見立て」ること、「比喩ル」ことは共に、写像的な重ね合わせによる比喩的思考の生成に着目しており、それが詩的契機としての学習材に成り得る可能性がある。

見立てとは、「対象を他のものになぞらえて表現すること」¹⁵⁾であり、和歌・俳諧・戯作文学・歌舞伎などの伝統芸能や、見立て絵などの芸術作品において用いられてきた比喩的表現である。音楽性あるパウル・クレーの絵画と詩のコラボレーションによる谷川俊太郎(1995)の「クレーの絵本」¹⁶⁾も有名である。このような写像的な比喩的思考は、学校教育の中では造形活動や抽象デザインなど図画工作科や美術教育において扱われてきた傾向にある。一方、国語教育においては、高木まさき(2008)が「メディア論的転回」¹⁷⁾から多種多様な複合的情報をも包括する国語の再考を提案している。

そこで、詩創作の国語科学習過程において、比喩的思考が立ち上がる見立てが可能な学習材対象として、「モダンテクニック」を提案する。モダンテクニックは、絵を描くのではなく、スパッタリング・ドリッピング・ドローイング・マーブリングなど、様々な手法を使って偶然の模様や形を生成する未見の抽象性を内包する。故に、既存の見方とのズレによる見立てが詩的契機に成り得ると想定した。

(2) 見立てと詩的言語の関係構造による学習材

モダンテクニックを共有可能な詩的对象とすることで、色、形、線、流れ、位置など、空間認知や視覚・聴覚による身体的感覚を揺さぶり、学習者個々の比喩的思考が見立てとして立ち上がる。この見立てた経験によって何らかのイメージをつくり上げ、形成された心的表象が、詩創作における詩的言語へと転換していくのではないかと考える。

足立は、「話者、存在、思想、時間・空間、ことば」が詩的言語へ異化する要素と捉え、児玉は、「視点や語り」「発想や認識」「リズムや響き」「フォルムや構成」「イメージや造型」¹⁸⁾等の言語の仕組みが詩の生成を促すとしている。つまり、「見立て

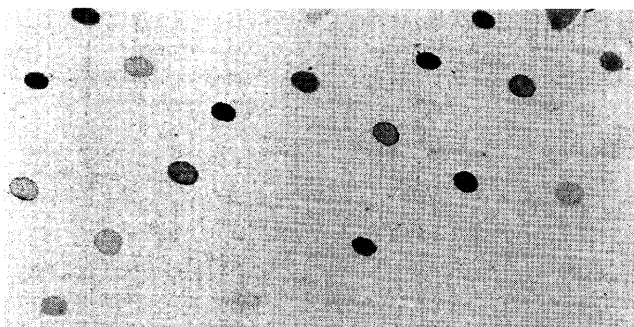
第2日目 第4会場③

により生成したイメージから、詩的言語の仕組みに気づく」転換や、「詩的言語の仕組みが、どのような見立てによるイメージを拠り所とするのかメタ認知する」という、生成過程における二方向の位相によるズレに立ち止まる必要がある。この言葉とイメージ化のズレを相対的に捉え直し葛藤する二方向による比喩的思考が、詩創作における学習材と成り得るものと考えられる。

4 見立てと詩的言語の仕組みにかかる枠組

詩の生成過程と一体化した対話における学習材の有り様を考察するために、モダンテクニックと抽出児である3年生の詩作品を対象に、見立てと詩的言語の仕組みにかかる枠組を見出していく。

【シャボンによるモダンテクニック】



【美希の詩作品①】

こんな雨になったらな
ぼつぼつ
こんな雨だったら
にじ色キャンディーが
ふつてくる
ぼつぼつ キャンディー雨
こんな雨だったら
七色わたあめが
ふつてくる
ふわふわ わたあめ雨

【美希の詩作品②】

こんな雨になったらな
ぼつぼつ
こんな雨だったら
にじ色キャンディーが
ふつてくる
ぼつぼつ キャンディー雨
こんな雨だったら
七色わたあめが
ふつてくる
ふわふわ わたあめ雨
毎日、歩道きょうを
上るのがいやにならない
キャンディー雨
一週間に一度、朝市に
行きたくならない
わたあめ雨
ぼつぼつ あっ！

美希は、カラフルな絵の具を混ぜたシャボンによって形作られた丸い点を見て、雨の音や色、降る様子と好きなキャンディーやわたあめ等のお菓子を見立てる。そして、見立てたイメージや音がそのまま、詩作品の中で直喩や擬態語・反復の使用を促し、「イ

メージ性や音楽性」を強調する詩を創作している。

しかし、更新された詩作品②をみると、空想と実体験とを対比的に組み合わせる「物語性」が加わる。さらに、「あつ！」と飛躍したまま着地しない未完成な不確かさを使用する姿も現れる。

【弓弦の詩作品①】

うちゅう
みんなの母
うちゅう
ぼくたちは
うちゅうの子ども
だからみんな
かぞく
みんなかぞくなんだ

一方、同じくシャボンによるモダンテクニックを見立てた弓弦は、美希とは異なる見立てと詩的言語を使う。弓弦は、点を大きさの違いを見て、大小様々な星から宇宙を見立てる。そして、母なる宇宙と子どもの関係から壮大な家族概念の「メッセージ性・テーマ性」を強調する詩を創作している。

【スパッタリングによるモダンテクニック】



【一樹の詩作品①】

雨の音
今日は 雨だ
でも ぼくはうれい
だって あたらしい長ぐつが
はけるんだもん
ヤッター ヤッター
わあい わあい

一樹は、水色の点を見て、雨を見立てながら、買ってもらったばかりの新しい長靴をはく自分の経験的イメージを重ねて見立てる。そして、実生活における「事実と思い」をそのまま素直に組み立て「物語性」のある詩を創作している。また、雨水と土がはじけ飛ぶ様を見立てた箇所を、詩の文体においても行間を大きくあけ、長靴をはき雨の中を歩く様を想像可能な文体にする工夫がみられる。

【大輔の詩作品①】

雨 さん	いた いた た た	いた いな	す ご い 雨 だ	雨 だ	雨 だ	ザ ア ザ ア
もう ふ ら な い で ね						

一方、同じくスパッタリングによるモダンテクニックを見立てた大輔は、一樹とは異なる見立てと詩的言語を使う。大輔は、下方に位置する茶色の点を土として見立て、雨に打たれる出来事をイメージする。その上で、土を語り手にして、その声を「物語として語る」詩を創作している。

これら初期の詩作品は、それだけでは詩的表現としての機能が見出しにくいものもあるが、モダンテクニックの脈絡と融合することによって、見立てと相互補完されて詩的言語が生成される可能態として見ることができる。ここから、見立てと詩的言語の仕組みにかかる枠組が暫定的に見える。

【解釈者の立場】

【作者的立場】

リズムの見立て	——	音楽性	ことば
イメージの見立て	——	連鎖性	語り手, 存在
ストーリーの見立	——	物語性	時間, 空間
テーマの見立て	——	象徴性	主想

【形式的立場】

リズム, 音韻, オノマトペ, 反復
語り, 対句, 倒置, 飛躍・着地 連
直喩, 隠喩

学習者個々の見立てによる反応を詩的契機として活性化させつつ、同時に相対化しながら、見立てとの関係において自分の詩的言語をつむぐ姿が見られる。詩が生成され更新されていく過程における対話の中で、どのような学習材が機能したのか、見出した枠組を活用してその内実を考察していく。

5 詩創作の学習デザイン・分析方法

(1) 詩創作の学習デザイン

※ 研究メンバーである本学附属小学校の水谷徹平教諭の授業実践を研究対象とする。

- ①対象 上越教育大学附属小学校3年 40名
- ②観察期間 2012年5月29日～6月30日
- ③単元名 「あわせ詩^{うた} ～模様とことば～」
- ④目標 模様から見立てたことと、ことばから想

像したことが合うようにあわせ詩をつくる。

⑤学習計画 (全6M 1M…30分間)

- モダンテクニックの模様から見立てたことをもとに、詩を想像することに問題関心をもつ。 1M
- モダンテクニックの模様から見立てたことをもとに詩作する中で、詩の特性に気づく。 ※本時 3/3M
- 創作した詩のことばをもとに、モダンテクニックの模様や詩の特性を抛り所にして、見立てたことやあわせ詩のよさを交流する ※本時 1/2M

(2) 分析方法

分析観点Ⅰ作用・浸透・総合的対話層の学習材

分析観点Ⅱ「見立てと詩的言語」による枠組

見出した二観点により、学習過程の内実を考察する。

6 詩創作と対話の分析考察

※ 以降、分析考察、成果課題は略。: 当日発表
【註】

- 1) 文部科学省 2008『小学校学習指導要領』p.13,16
- 2) 足立悦男 2000「異化の詩教育学—教材編成の理論と方法」『教育科学第34巻』島根大学教育学部紀要 p.11
- 3) 前掲書2) p.10
- 4) 塚田泰彦 1992「詩的表現の学び方」『実践国語研究No.123』明治図書 p.21
- 5) 児玉忠 2012「詩の学習指導における読解・鑑賞と創作との関連」『月刊国語教育研究No.484』日本国語教育学会 p.30
- 6) 7) 府川源一郎 2002「『詩』を作る、ということ」『月刊国語教育研究No.357』日本国語教育学会 p.45
- 8) 古閑晶子 2013「対話を核とする学習過程デザインの要件—連詩創作における共創的対話の考察—」『国語科教育第73集』全国大学国語教育学会 p.26
- 9) 前掲書8) p.30
- 10) 山梨正明 1988『比喩と理解』東京大学出版会 p.8
- 11) 12) 山梨正明 2000『認知言語学原理』くろしお出版 p.132
- 13) 14) 岩田純一 1988「『比喩ル』の心」『比喩と理解』東京大学出版会 p.164
- 15) 新村出編 2008『広辞苑』岩波書店 p.2696
- 16) 谷川俊太郎 1995『クレーの絵本』講談社
- 17) 高木まさき 2008「国語教育研究のメディア論的転回」『新しい時代のリテラシー教育』東洋館 pp.31-43
- 18) 前掲書5) p.31